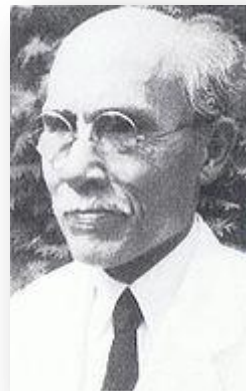


日本で最初の音楽伝道者

三谷種吉物語



♪「十字架にかかりたる 救い主を見よや
こは汝が犯したる罪のため
ただ信ぜよ ただ信ぜよ
信ずる者はたれも みな救われん」

日本人による賛美歌の先駆けとなった種吉の傑作のひとつで、嘲る人も多かったが、この歌によってキリストの教会に導かれていった人も少なくない。

種吉が生まれたのは1868年(明治元年)。まだキリスト教が禁制の時代であった。父の左介は開港間もない神戸で成功を収めたが、尊敬する人物から「耶蘇教を信じなければ本当の人間にはなれないぞ」と強く勧められ、信教の自由が国民に伝えられる前に、決死の覚悟で洗礼を受けた。種吉も、この同じ日に洗礼を受けた。

その後、同志社で新島襄のもとに学び、ピューリタン的な生活に明け暮れたが、在学中、リバイバル(信仰覚醒運動)が自然発生的に起こり、多くの学生たちと同様、種吉もこの時、救いの確信を得た。

しかし、父が保証人となっていた知り合いが破産したため、種吉は同志社中退を余儀なくされた。

転機は、借金返済のため英国商館に勤めたところから始まった。昼は英語を生かして勤勉に働き、夜はイタリア人の音楽家についてチェロ、バイオリン、コルネット、楽理を学ぶことができたのである。

その頃、松江においてはすでにバックストンが俊英の若者たちに大きな感化を与えていたが、自身の後継者としてイギリスから呼んだウィルクスの日本語教師に種吉を抜擢した。バックストンのもとでの学び、ウィルクスとの交際により、種吉は聖書をより深く理解するようになった。



バックストン

伝道者として迫害による死の危険を何度も通り、わらじ履きで、北は北海道から南は鹿児島まで、ほとんど徒歩で、アコーディオンを携え、「ただ信ぜよ」を歌いながら伝道してまわった種吉は、昭和二十年、七十六歳で地上の戦いを終えて天に凱旋する。

今回は、まだ西洋音楽がめずらしかった時代に、日本人に歌いやすい、数々の賛美歌の名曲を世に送り出した稀有の伝道者、三谷種吉の生涯を辿ります。

記

1. 日時 : 2018年1月12日(金) 10:30 AM より
2. 場所 : ゴスペルホール(電話 026-295-6705)
3. 講師 : 尾崎富雄(ゴスペルホール代表)